

## 2007 年度 夏学期 政治 1 試験対策プリント 担当教員：高橋 直樹

### 【前半】

#### 001 政治学的思考法

##### (1) 経済学—経済の論理を抽象化

- 〈指標〉・利益(benefit)
- ・費用(cost)
- ・効率(efficiency)

##### (2) 社会学 主流：アメリカの社会学

人間がまとっている“着ぐるみ”をはずす→人間を抽象化

個人は“役割(role)”を持っていて、実体を離れた複数の“役割”を果たす。

その“役割”が複雑に絡み合っているのが社会。

⇒“役割理論(role theory)”

- ・社会心理学
- 帰属意識(identification)

現実には帰属している集団と帰属意識を持つ集団が違うこともある。

##### (3) 政治学 政治の世界にとどまらない

“権力(power)”…人に強制する力

第二次世界大戦後世の中が変わっていく

→伝統的な power に加え、leadership という概念が生まれる。

leadership：人々が求めているものを引き出し、説得して一つにまとめていく力。

ex. マハトマ=ガンディー

power と leadership は、結果は同じようなものだがプロセスは違う。

協働(cooperation)：人々を一つにまとめあげ、皆のためになることをする。

共生(symbiosis)：皆(自分達と違うもの)とどう折り合いをつけてやっていくか。

⇒democracy にもつながる考え方

#### 010 政治科学とは何か

政治科学＝現代政治学

#### 011 政治学の歴史的三類型

##### (1) 政治哲学 古代ギリシャで発達 (プラトン, アリストテレス etc...)

- ・規範(的) 〈should must〉⇔事実
- ex. “戦争は起こしてはならない” ⇔ “戦争が起きている”

現実派：事実にあわせて規範を変える

擁護派：規範を大切にし、事実を変えていく

—規範—

よりよい社会・理想的な政治とは何か

## (2)政治イデオロギー (中世～近代)

実地的(practical) (ジョン=ロック, ルソーetc...)

現実の政治の批判・擁護ができる

イデオロギー 現実を意識し、現実を変えるか、擁護するか

近代で最初の人物はボーダン 絶対王政の国王(仏ルイ 13・14 世)を擁護し、中世以来の封建遺制を批判

## (3)政治科学(現代政治学) ここ 60 年ぐらい 第二次世界大戦後のアメリカで発達→主流に

経験的(empirical)

現実を観察→色々なことを導く (自然科学にならう)

### ・注意すべき点

1. (1)→(2)→(3)のように政治学が進歩してきたわけではなく、力点の置き方が変わっただけである。

昔からあるものが古い、役に立たないというわけではない。

### 2. 理念型 ideal type (idealtypus)

(1)～(3)は現実には存在しない類型。議論・思考の道具として使う。

100%純粋な“政治科学だけ”の本はない。また、アリストテレスの『政体論』には(3)も含まれている。

## 012 政治科学

### (1)事実と規範の分離

規範を脇に置いておき、まず事実を考える。

⇒価値中立性(価値自由性) どんな価値観にも縛られない

### (2)経験論 帰納的論理：具体的事例の観察⇒結論

演繹的論理：抽象的命題⇒結論

### (3)学際性(inter-disciplinary) discipline=学問分野

学問分野をこえた研究

古代ギリシャ 政治学＝哲学 政治学は最も古い (経済学は 18 世紀～)

新しい学問は science に近づく

しかし、政治学は規範を切り離せない→science 化が遅くなる  
よって、経済学・心理学など、より science 化した学問を借りてくることに  
→inter-disciplinary になる

#### (4)政治科学の歴史

##### 1.行動論革命(behavioral revolution) ～1970 年代まで順調

第二次世界大戦前：哲学・イデオロギーの色彩が強い

〃 後：人間がどの様に政治に関わっているかをまず観察

ex.投票行動（選挙予測）

元々どのような人がどの政党に投票するかを予測するためのもの

年齢，年収，地域，教育 etc...

but 最近…投票者が気まぐれに→行動予測が明瞭でなくなり行き詰まる

radical 左派から批判

…現実に影響を与えているのか、意味があるのか？

政治学そのものの存在意義⇒現実の政治を変えるためにある

“A political Political science” “現実の政治に影響を与えない非政治的政治学”

Post-behavioralism post=～をくぐり抜けた

≠脱

behavioralism の否定ではなく、それからの発展

##### a. 合理的制度論 右寄り・保守派

rational choice 人間は本来合理的→合理的選択をするもの

社会制度が人間の合理的選択を妨げる→抑圧する制度の撤廃

##### b. 歴史的制度論

人は混乱した時行動の類型を失う→制度には歴史的意味があり、その意味を考えてから議論すべき

#### (5)注意すべき点

##### 1. 体系？

⇒完成した一体系を持った学問として確立されているわけではない

体系性なし⇔理科系学問…体系的（どの教官も同じように教える）

経済学・社会学…体系性がわりとある

社会科学の中で政治学は体系性がない

⇒物理学・生物学と同じようにとらえてはならない

では、体系性がないのに学問なのか？

⇒一つの方向性・特徴を持った学問の総称（ラベリング・ネーミング・レッテル）

## 2. 科学＝客観的？

T. S. クーン『科学革命の構造』

科学は客観的とは言えない。様々な科学の中に考え方の枠組み(paradigm)がある

つまり、ニュートンの paradigm とアインシュタインの paradigm は根本的に違う

真理は一つの paradigm の中でしか通じない。別の paradigm には別の真理がある …現在では常識となっている

一定の価値観を組み込んだ形で政治科学を考える

Comparative Politics (60 年代)

冷戦の時代

政治の発展は単線形の発展が前提→後に「誤り」とわかる

## 3. 理論

a. model モデル 政治的要素を抽出・単純化し、整理する→規則性があるかもしれない

b. methodology 方法論 何に注目するか、何をどのように測定するか？  
についての論

## 100 意思決定の基礎概念

### 110 利益関心 interest

### 111 概念

#### (1) 基本的な考え方

actor 行為者 (考えることも含め行為を行う者を抽象化)

…この人はある場面でどう act するか

behavior 行動者 …継続的にどう行動するか

決めること(どう行動するか)を D(decision making =意思決定)で表す

$D = f(Ir)$   $Ir$  = 利益関心  $D$  は  $Ir$  の関数

利益関心にしたがって我々は行動する (その人が得になる、選びたい方)

得：幅広い。経済的な利益のほかに、心理的・感覚的なものも含む

### 112 定義

actor は合理的存在

合理的：rational 目的合理性：目標達成のための最短手段を選ぶ

### 113 歴史的源泉

#### (1) 人間の合理性

1. 中世のキリスト教…神＝絶対者(完璧な理性)⇔人間＝導かれる存在

2. 近代の人間観

John Locke(1632-1704)

自己決定的人間 “人間は自分自身で合理的に判断する(神によらないでいい)”

(2)利益の考え方

1. Machiavell(1469-1527) 当時はルネサンス期 イタリアが多くの国に分裂していた頃

『君主論』

野心と食欲：人間の本質

“人間は恐れている者より愛情を感じている者を大きく傷つける”

↓

処刑の恐怖

↓

恩義の絆

人間は本来邪悪であり、利害によって恩義の絆は断ち切ってしまう

愛情<利害<処刑の恐怖

…利害が絡んでも裏切れない

マキアヴェリの言う“邪悪”

“元来人は神に導かれ、清く正しく生きるべき”＝キリスト教的人間観

自らの利益を求める→近代の人間＝邪悪

2. J.Bentham(1748-1832)

功利主義(Utilitarianism)

a. 幸福：快樂があり、苦しみがない

快樂：人間として楽しめること(哲学の議論・新しいものの考え方にふれる)

苦しみ：古い時代に縛られ、好きなことが出来ないこと

b. 人間：幸福の増大を原則に人は生きる

## 120 影響力 influence の理論

考え方 1. Interest (に基づいて行動)

2. 他アクターへの influence

アリストテレス “人間は社会的動物(Zoon Politikon)である”

人間は社会の中で生きて初めて人となる

全てのアクターは interest に従い行動する。しかし、他アクターの influence によってかわる。

$D = f(I_r, I_f)$   $I_f = \text{influence}$

## 121 概念

1. If なし      する      If あり      しない
- $$X - - - -> A \longrightarrow \alpha \qquad X - - - -> A \longrightarrow \alpha$$
- する  
 $\longrightarrow \beta$

A(If を受ける actor)の行為は X(If を行使する actor)の interest に基づく。

2. 1. If は X と A の関係によって決まる。ピストルの弾(実体)のような、明らかな暴力ではない。関係の上ではたらく一種の力である。

2. 程度・度合      ある／なしでわけるのは粗雑すぎる。

(1)定義

1. 影響力は他の actor の意思決定を変えることのできる程度あるいは度合いである。

2. 目に見えない「気持ち」の変化も含まれる。

(2)補助概念

1. 影響力の領域 (domain)

どれぐらいの人数に影響力を持つか

2. 範囲 (scope)    どんな事柄に影響力を持つか

3. 政治資源 (political resource)

影響力を行使する手段    ex.物理的な力(暴力)・富(お金)・正義・愛 etc...

4. 確実性 (reliability)    影響力が相手に対して効くか

5. 強度 (strength)    状況・行使される人によって変化

行使される側がどのぐらい嫌がっていることをやらせられるか

6. 費用 (cost)    使って減るもの・減らないもの

影響力を行使することによって支払う犠牲

政治資源とは少し違う      ex.地位・役職 etc...

## 122 特殊な影響力

(1)潜在的影響力 (potential influence) ⇔ 顕在的影響力(manifest influence)

ある actor がいつでも政治資源を利用できる

⇒その actor は潜在的影響力を持つ      ex.小泉元総理

(2)権力(power)

αをするな

$X \longrightarrow A - - - \alpha \Rightarrow \text{deprivation(価値剥奪)}$

If

このとき A が α を行った場合、actor が大切にしているもの (ex.命, 財産) を奪う

権力をもつもの…国家と考えられる

マルクス主義では国家が権力を独占していると考ええるが、政治科学(political science)では権力を国家が独占するとは考えない

### (3) 強制(coercion)

$\alpha$  をしろ

$X \longrightarrow A - - - \alpha \Rightarrow d$  (価値剥奪)

$I f - - - \beta \Rightarrow d$

したがっても従わなくても、大きな価値剥奪をうける

ex. (強盗にあったとき)「全財産をよこせ、さもないと殺すぞ」

Aは $\alpha$ をしてもd、しなくてもdという結果になる

### (4) 権威(authority)

$\alpha$  をしろ

$X \longrightarrow A - - - \beta$  をしない

$- - - \alpha$  を納得してする

納得させて行動を変えさせる。これは正統性(legitimacy)による ×正当性

正統性…数値化された実績、社会での知名度 etc...

legitimacy は必ずしも just(正しいこと)とは限らない

## 123 歴史的源泉

### ◎ 伝統的な権力(power)の概念

power は人を支配する力, actor の意思に反して行動などを変える力

(1) 支配=服従の事実 人間の歴史の大半にあてはまる ex. 古代ギリシアの奴隷

(2) 実体的権力観

力学の影響を受けて流行った考え方

権力の基礎はどこからくるか? (権力の由来)

1. 15 世紀 マキアヴェリ…軍事力

2. 19 世紀 Weber 支配の三類型 (権力の基礎三類型)

1. 血統 2. 法律 3. charisma(カリスマ)

カリスマ…世の中を変えるほどの超人的・霊的力を持った人。ただし転落も早い

3. K.Marx (カール・マルクス)…富

### (3) 機能的権力観(関係的権力観)

権力がはたらく(効く)のは、特定の関係にある人々の間だけ

社会的指導者のみに注目

大衆主義(一般人にも注目)+機能的権力観(関係的権力観)=影響力の理論

【後半】

## 125 批判

### (1) 構造的権力観

影響力の理論は、影響力を誰もがそれなりに持っているとしているが、実際に言っていることは古来からの **power** ではないか？ (If = power)

人(権力者)が人(大多数の一般の人々)を支配するという一番重要な問題をごまかしている。

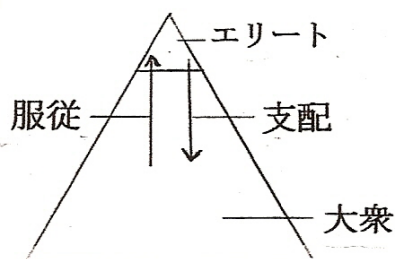
“影響力は誰もがそれなりに持っている→均衡がとれていて、世の中がうまくいつている” = “balancing theory (均衡理論)” ⇒ 偽りである！

C.W.ミルズ『パワー・エリート』(東大出版)

“アメリカは均衡がとれた社会ではない”

アメリカのエリート・・・政治エリート (ホワイトハウス)

- ・産業エリート (石油・軍事資本 etc...)
- ・軍事エリート

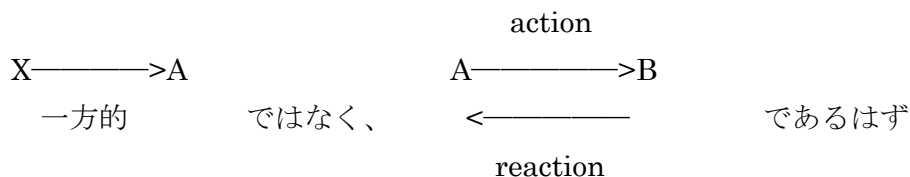


権力は人と人との関係のように生易しいものではない  
権力はあくまで実体(武器などの支配手段)である

### (2) 相互作用論(interactionism)

(1) ⇔ (2)

影響力の理論とは本当に機能主義か？ 一方的な関係なのか？



一方的な関係は本当の機能主義ではなく、旧来からの権力理論のやり直しにすぎない。

## 200 政治的人間の理論 (現代政治学の古典的理論)

今までは“actor は合理的”ということが前提

ここからは合理的でない人間を取り入れた理論も扱う

## 201 人間の考え方



1. キリスト教
2. ロック（合理的人間観）  
人間…理性あり⇔動物…理性なし  
人間には理性があつて過ちを改めることができる、動物とは違う存在である
3. C.Darwin 『種の起源』（1859） 人と動物は生物学的には親戚である  
人間⇔動物という考え方に衝撃を与える（両者を隔てる垣根がなくなる）  
→しかし、それでも人は全ての動物の頂点にいて、高度な心理活動を行っている。
4. S.Freud  
それまで注目されていなかった、人間の持つ非合理性(irrationality)に注目

## 202 フロイトの人間観

### （1）心の構造…三分されている

1. id (it) …心の最奥にあり、生まれつき持っている  
drive(欲動)や impulse(本能)といった独特の力に動かされている。  
drive や impulse⇒欲求の充足を求める
  - a. eros : 生, 性, 自己保存の本能
  - b. 死の本能(death instinct) ←現在では否定的  
自他ともに対する破壊本能  
thanatos(タナトス／サナトス): 死の本能を動かすエネルギー
2. 自我 ego（英語では self）  
id から出てきた様々な欲求をコントロールし、外界にはたらきかける  
ex.(id)空腹を感じる→(外界)食べ物を買って食べる
  - a. 意識的機能  
自我が id を抑えていると自分で分かっている場合  
ex.「ゲームをしたいが受験があるから勉強する」
  - b. 無意識的機能  
id からの欲動を充足できない、または超自我からの命令に従えないときには自我が傷ついてしまう。その時無意識のうちに自我を守ろうとする場合⇒自我防衛
3. 超自我(superego)  
自我のうち得に社会に近い部分がわかれてできる。社会の倫理的基準が内面化したもの  
社会の倫理的基準…時代によって異なる ex.身分制度に従う  
倫理的基準の内面化…長い間社会の中で暮らし、教育を受け、人と関わらううちに社会の倫理的基準がとり込まれる → “良心” “罪悪感”
  - a. 批判的機能

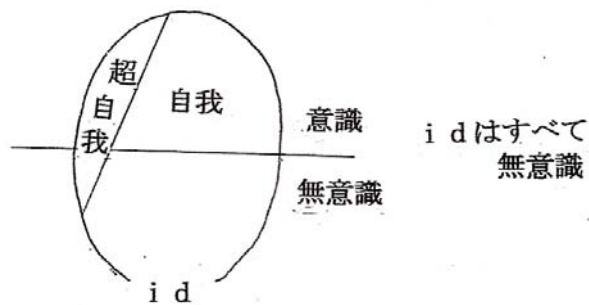
自我を批判し、命令する→自我がこの命令に従えないと、自我は無意識に自己防衛する

b. 自我理想

理想を設定し、その理想に向かって努力することで、id からの欲動を遮断する      自我理想と実際の自我とを近づけるよう、自我に命令する

(2) 心の動き

人間の脳の中



id はすべて無意識であり、果てしがないので深さはわからない

研究内容…器質：脳の中の活動について

精神：心の働きのみ

フロイト(脳神経学者出身) “人間の脳内にそれぞれ対応する部分がある”

それ以後の生化学の発達、測定機器の進歩

→ 器質研究…発展

精神研究…衰退

フロイトの説は間違いではなかったが、当時はそれを確かめられなかった

(3) 重要な概念

1. trauma(外傷)

心に大きな傷を与える経験は自我が処理できない→抑圧され、無意識に潜む→関係のない場面でも心身に影響を与えることがある

2. 防衛機構(defense mechanism)：理由をつけて自我を守る

a. 抑圧(repression)

自我が傷つかないように、欲動・衝動を無意識のうちにないものにする

b. 置き換え(displacement)

衝動の対象を別の対象(代理の対象)に移すこと

c. 反動形成(reaction formation)

衝動を自我が認められる正反対のものに置きかえる

ex. 家族など近い間柄の人への憎しみ→“尊敬している”と置きかえ  
(この無意識が表に出てくると危険)

d. 隔離(isolation)

辛い体験(感情)を自分の経験から引き離し、自分の実際の経験でない、  
映画のワンシーンのようなものとして記憶する

cf. 抑圧(記憶自体を忘れてしまう)

e. 同一視(identification)

対象を自分の中にとり入れてしまう

無理な命令に従う時、何かと自分を同一視する

ex. 特攻隊(国(国土)と自分を同一視)

f. 合理化(rational)

自分のやったことを正当化するために無意識のうちにもっともらしい  
理由を示し、本当の理由のようにする ⇔ 嘘・言い訳 (意識的)

“sour grape theory” 狐が手の届かない葡萄をすっぱいと決めつける

## 210 政治人(political man)の理論 —H.D.Lasswell

非合理的人間を政治学に導入した最初の理論で、行動革命の特徴がよくあらわれている

[参考] ラスウェル『権力と人間』(東京創元社) 原書 1948『power and personality』

政治人の理論: 政治人という独特の人々は本能に左右されている

$B = f(o)$      $B$ : behavior     $O$ : Organism(生活体)

Organism: 行動する主体を全てあわせた概念 (ここでの「主体」は、人間と動物を区別しない)

political man の Behavior は Organism によりつくられる。

## 211 政治人の概念

(1) 考え方: 人間の行っている行動・活動は多種多様

(ex. 政治的, 経済的, 文化的 etc...活動)

1. 政治人: 政治的行動・活動をする人

どんな人でも政治的行動・活動をする

(選挙等だけでなく、集団内の揉め事に対し妥協案を出すことなども含まれる)

政治人は制度や機能の中に組み込まれる

2. 「人」: 具体的人間ではなく、一人の人間のある側面を表す

—A.Smith の概念から—

“economic man” (経済人): 最小の費用で最大の効果を上げるという経済原則に基づき活動する人間の側面

⇒制度及び機能として政治的行動をする人間の側面を指す

## (2)社会観

社会において、人間は、資源(resource)に基づき、制度(institution)を通じて、価値(value)を追求する。

資源：支払う代価      価値：本人が欲しいと思うもの

制度：定型化された行動

→行動論的視点から。時代によって価値を手にするための制度は違い、  
制度が存在しない場合もある

(ある制度にはそれ特有の価値が分配されている)

### —制度と価値—

〈制度〉	〈価値〉
ビジネス	富
犯罪	〃
職人仕事	技能
病院	健康
家庭	愛情
政治	権力

## (3)概念

政治人：他の人々と比較した場合、様々な価値の中で特に権力という価値を重視  
する人の類型←(1)の定義と少しズレている

なぜ「権力」を重視するのか？→その人の **Organism** によっている

## 212 政治人

$P(\text{政治人}) = p \} d \} r \quad \}$  : 変換記号

p : private motive(個人的動機)

(フロイト) : 幼年期・少年期の家庭環境による←非合理的人間観

⇒「父への憎悪」(同性の親への憎悪)=エディプス(エディクトラ)・コンプレックス

↓「変換記号」

d : displacement(置き換え) ⇒父への憎悪を public object に

↓「変換記号」

r : rationalization(合理化) ⇒public interest に

ex.ブッシュ大統領のイラク戦争

[ブッシュ父は湾岸戦争を中途半端なまま終わらせる→子の自分がイラク戦争

に成功すれば、コンプレックスを清算できる → (but 失敗)]

p : 「有能な父が憎い！」

d : 「テロリストが憎い！」

r : 「テロリストが憎い」のためにテロリストを殺す、と合理的に決定

## 213 類型学

〔性格タイプ〕

〔政治的類型〕

- |                     |                                |
|---------------------|--------------------------------|
| 1. 強迫型(compulsive)  | 官僚(administrator)              |
| 2. 劇化型(dramatizing) | 扇動家(agitator)                  |
| 3. 冷徹型(detached)    | 外交官(diplomat)／仲裁者(conciliator) |

ラスウェルは頭の中で想像したのではなく、観察して上の表を作った

対象：アメリカの判事（選挙制・一種の政治職）

家庭環境・日常の行動を調査→性格タイプを導く→政治的類型をつくる

### 1. 強迫型

家庭：経済的に恵まれ、社会的地位も高い（ex.役所高官，大企業幹部 etc...）

父親が冷たく厳格・成績にうるさい 母親も世間体を気にする →家庭に愛情がない

長兄であり、歳の近い弟がいる

→親の愛情を獲得しようとし、相手とはりあう(互いが競争相手)

→物事・人間関係を全て画一的に処理。細かい点にこだわり、融通がきかず、温かみに欠ける

⇒官僚タイプ

規則一点張り、自分の権限が侵されるのを嫌う

### 2. 劇化型

家庭：屈折している 母親は中流階級，父親は下層階級出身

母親は、自分はいい相手に巡り会えず、落ちぶれたと感じている

→子供に望みをたくし、一流大学に入れようと教育する

母親が父親の悪口を言い、それに対して父親が手をあげる…というように、両親が不仲で家庭は緊張に満ちている

→他人の感情を読み取るのが上手くなる(両親の機嫌をうかがうのに慣れているため)

⇒扇動家タイプ

自己顕示欲が非常に強い 細かい点はいい加減だが、視野は広い

多様性・新しさを好み、順応が早い

### 3. 冷徹型

資料が少ないため、家庭環境・日常の行動は不明

怒り、悲しみ、愛情といった感情を持たない 冷酷になりやすい

⇒外交官・仲裁者に多い

激動する時代(フランス革命期など)を生き抜いた大様の家来・大臣など

## 214 批判

### (1)歴史的制約

第二次大戦後に書かれたラスウェルのこの本は、独裁者(ヒトラー・スターリン・ムッソリーニ)の時代の影響を大きく受けている→独裁者の分析には適している

but 現在、先進諸国では彼らのような独裁者はもう登場しない

⇒国民の力がついてきた今の時代には、leadership 論の方が適当

### (2)エリート主義

大衆主義が十分活かされていない

211 の(1)→(3)の「政治人の定義」のズレは、機能論→実体論というズレに直結  
(具体的な人間を分析し考察しており、機能論的視点が抜け落ちている)

### (3)フロイト的人間観

$B = f(o)$

人間の合理性・自由意思は軽視 (政治的行動は幼少年期の環境に決定される)

⇔心理学の行動主義 behaviorism (政治学の行動論主義とは全く無関係)

人間の人格形成は後天的なもので、色々な条件で人間の行動を変えられる

人は環境に対して選択的に反応する

「ハンドブック 政治心理学」(北樹出版 2003)

## 300 政治集団の理論

### 301 社会学の定義上の集団 cf.群集(単なる人の集まり)

1. 共通の目標・関心がある

2. 地位(status)と役割(role)の分化 (←役割理論)

地位: 集団の中での位置 役割: 集団の中での役割

地位・役割に対応する規範(norm)があり、役割からの逸脱は処罰(assumption)の対象となる

ex. 教員が授業を教えない, 学生が授業中に騒ぐ etc...

規範は行動によって示す

3. われわれ意識(We consciousness)の存在 ex. “われわれは東大生だ”

### 302 集団の考え方 一起源

(1)ギリシャ・ローマ時代

集団そのもの(ポリスなど)はあるが、集団に関する理論はなし  
つまり、ポリス Polis の政治をどうするか、という社会・国の理論はある  
but ポリスの中の人々(自由人, 奴隷 etc...)を扱った理論はなし

(2)中世 同様に集団に関する理論はなし

a. 神の国(Civitas Dei) ローマ=カトリックの宗教共同体の考え

絶対者たる神を中心として、個々の信者は神への愛(アガペー)を通じて直接  
神に結びつく その仲介者が教会組織  
これも共同体全体(=社会)の理論  
信者は神の前では皆平等なので、集団の理論、特に(2)は存在し得ない

b. 厳重な身分制を基礎に成立

“有機体的社会観”(中世で全盛)

近代の観念：社会は個人の集まり

中世の観念：社会は有機体で、動植物の全体と等しい

利点：身分の違いを説明できる

社会は植物と同じようなもので、貴族は花として、農奴は根として生  
まれたのであり、両者は互いに必要なものである  
よって、農奴は農奴でいい

→社会は全体で一つ⇒集団の理論はあってはならない

(2)近代前半(集団の理論の発展)

・職人集団(ギルド) 親方：独立して仕事を営み、弟子の育成ができる

・都市の発達(自治権を有する)

対抗勢力も発達

近代絶対主義国家 国土も国民(臣民)も王家の財産

近代化の妨げであった封建遺制を打破

近代絶対主義の勝利→絶対王政・国教制定→聖職者の反発

→都市で新たな考えが生まれる

強くなりすぎた国家からいかにして個人を守るか

☆Althusius の政治理論(1557-1638)(オランダ：スペイン治下)

a. 社会契約説(我々の社会は契約によって成り立っている)

※この説は、近代後半の「個人の契約により国ができる」というものではな  
く、「家族同士の契約により地域共同体がつくられ、地域共同体の契約で、

Civitas(共和制)がつくられる」というもの  
家族——→地域共同体——→Civitas(共和国)  
契約                      契約

b. 多元的国家論 (pluralism)

国家(Civitas)は地域共同体や家族に並ぶものでしかない

(権力は国家の独占物ではなく、個々の集団が権力を持つ)

1. 意味：国家をその地位から(理論の上で)引きずり落とした

⇔現実：国家の力はますます強大に

2. 相対的優越：国家は共同体同士の関係の調節役 (Althusius の説から発展)

(4)近代後半

1. 絶対主義 地方貴族の勢力を押さえ、国を統一する

John Bodin(1530-1596) 仏の絶対主義の理論的支柱

4. 近代政治イデオロギー：国家擁護と同時に個人主義にも基づく

Thomas Hobbes (1588-1679)：社会は個人の契約から成る (国家主権)

John Locke (1632-1704)：議会主権 (議会は人民の代表)

Jean-Jacques Rousseau (1712-1778)：人民主権 ロックを批判

“ロック氏によれば、英国の人々が主権を持つのは投票日に限られる”

(5)理由 [(1)~(4)に一貫して「集団」の理論はないのはなぜか？]

1. (マキアヴェリ)：政治に関われるのはほんの一部の人間のみであり、  
政治問題は社会レベルで考えればよい(集団が何をしようと実際の政治には関係ない) ⇒「社会」に注目→個人を説明

2. 政治を動かす力は個々人が平等に持っている

政治の問題は個人の理論か社会の理論による⇒集団の理論は不要

(「個人」に注目→社会を説明)

303 マルクス主義 (集団の理論の登場)

階級(class)の理論

(1)階級分裂 “有史以来、我々の社会は常に階級社会であった”

社会は複数の階級(=集団)から成り立っている

支配階級／被支配階級

生産手段(=富)を所有しているか否か

一方的な関係で、一度差が生じれば後はそれが拡大していくだけ

(2)階級利害 利害=利益 (儲かるか否か)

支配者と被支配者 (資本家と労働者) の利害は対立する



同一階級が全くの同利害、というわけではないが、同一階級の中では同じような状況が生じるため、同様の利害・要求が生じてくる

### (3)階級意識

階級利害を理性的に認識していれば、階級意識が生じる

「我々と対立するのは資本家、そして我々は労働者」

$G = f(I_r, C_s)$       $G$  : Group (階級・集団)      $I_r$  : 階級利害

$C_s$  : Consciousness (意識)

階級は階級利害と階級意識から成立する

## 310 集合的選択の理論 —K.J.Arrow&M.Olson

集合的選択(collective choice)

liberal : 「人に迷惑をかけない限り自由である」

democracy : 「物事を決めるにはより多くの人の意見を聞いて、その決定に委ねる」

先進諸国の政治体制 : liberal democracy

## 311 歴史的源泉

1. 近代の人間観 (ロックの「自己決定的人間」)

2. J.Bentham(1748-1832) 功利主義

a. 幸福とは何か→快樂があり、苦しみがない

b. 人間の行動→幸福の増大 (Interest の増大) ←合理的人間観

c. 最大多数の最大幸福 “greatest happiness of the greatest number”

最も多くの人々が最も幸福になるとき、社会は全体として幸福である

$\Sigma H_i \dots$  (個人の幸福量の総和)

各個人の happiness が最大になるようにし、それを足す

個人の  $I_r$  を大切にし、社会、集団を考える = liberal

(⇔社会学の集団(集団の目標があり、集団は個人の  $I_r$  をこえたもの)

←ファシズム、独裁、カルトに流されるおそれがあり危険)

では、政治的決定はどうか？

↓

3. J.S.Mill(1806-1873) 元祖多数決

多数決の方法

1. 個人的利益 (多数決の中に個人の自由を認める)

少数ではあるが全体の利益を個人の利益に優先させる人もいる

2. 利己心 (利己心を認める。当然バラバラであり、それに従う決定もバラバラ)

3. (ロックの前提によれば、人間は皆合理的だから)

全体の利益を考える = 最も合理的な案をとる = 少数だが一致している

4. 討論（全ての人に参加し、全体にとって何が一番いいかを徹底的に話し合う）  
 →討論の中で教育(プロパガンダ)が行われる  
 →個人の利益を寛容するにも関わらず、全体の利益が実現される  
 ⇒熟慮民主主義／討論民主主義(deliberative democracy)  
 注：×derivative(金融派生商品)←間違わないように！  
 現代の多数決には4の段階が欠けている！  
 ミルの説に戻ろう、という理論も政治学では出ている  
 ※個人を超えた社会・集団は考えられてはおらず、個人のI<sub>r</sub>が中心  
 →but 結論として全体の利益が実現される

### 312 基本的な考え方

collective choice      collectivity(集合体)≠group

「集合体」の概念は、個人を超えた集団や、「我々意識」は考慮されていない

$G = f(I_d) = \Sigma(I_d)$       G : 集団      I<sub>d</sub> : individual(個人)       $\Sigma$  : 総和

### 313 K.J.Arrow 一般不可能性定理

アロー「社会的選択と個人的評価」(日本経済新聞社 1977)

佐伯ゆたか 「決め方の論理」(東大出版会)

#### (1)前提

個人は幾つかの選択肢(alternative)のうちから任意の2つを取りあげ、その2つに対して選好(preference)あるいは無関心(indifference)を決めることができる

x, y, z (alternative)

$x > y$  : xの方がyより好ましい

$x \sim y$  : xとyどちらでもよい

(ここでの>は実際にはもっと曲線的な形をした記号であり、「}」に近いがパソコンでの打ち出しの都合上及びわかりやすさの観点から、上記の記号を代用とする。

※具体的な形を知りたい、という方は製作者または他の受講者に訊いて下さい。)

今、A, B, Cを人間とすると、

A :  $x > y > z$

B :  $x > z > y$

C :  $y > z > x$

となった場合、x, y, zについていかなる決定がなされるか

#### (2)アロー以前

1. Condorcet(コンドルセット)の理論 (フランス革命時・普通選挙が行われる)

2つの選択肢を取り出す→全てを尽くせば結論が出る

1.  $x$  と  $y$  :  $A, B$  が  $x$  を選ぶ  $\rightarrow x > y$  ( $x$  がコンドルセ式勝者)

2.  $y$  と  $z$  :  $A, C$  が  $y$  を選ぶ  $\rightarrow y > z$

1, 2 より  $x$  が選ばれる

## 2. Borda (蘭)

選好の順位一点数 (Condorcet はどのぐらい好きか/嫌かを無視している)

例えば 1 位に 7 点, 2 位に 4 点, 3 位に 1 点というように割り振る

(第 1 位を優遇したい場合はその点数を高く設定すればよい)

$x$  : 7, 7, 1  $\rightarrow$  15

$y$  : 4, 1, 7  $\rightarrow$  12

$z$  : 1, 4, 4  $\rightarrow$  9  $\Rightarrow$  よって  $x$  が選ばれる

but これでも好き嫌いの強弱は反映されない

(ex.  $C$  が  $x$  を非常に嫌っている場合でも、 $A$  が  $z$ ,  $B$  が  $y$  を嫌っているのと程度にしか嫌っていない、とみなされてしまう)

## 3. 持ち点方式

与えられた点数は皆同じで、配分は自由にしてよい

持ち点を 10 点とした場合

$A$  : 6, 3, 1  $x$  : 11 点

$B$  : 5, 3, 2  $y$  : 14 点

$C$  : 9, 1, 0  $z$  : 5 点  $\Rightarrow$  よってこの場合は  $y$  が選ばれる

$\Rightarrow$  but 本当にこれらの方法で合理的な集団決定が行えるのか?

## (3) アローの 6 条件

1~3 の方法では合理的決定にはたどりつかないとし、Condorcet の理論に戻って考える (Borda 以降の理論は扱わない)

ex.)  $A$  :  $x > y > z$

$B$  :  $y > z > x$

$C$  :  $z > x > y$

となった場合、この集団は集合的選択ができない

1. 連結律 :  $x, y$  は  $x > y, y > x, x \sim y$  のいずれかに必ずなる

(よくわからない、というのは  $\times$ )

2. 推移律 :  $x > y, y > z$  ならば  $x > z$  である (rationality の条件)

個人は合理的であるという原則に基づく

(非合理的な例 : 循環順序

$x < y < z < x \dots$  といつまでも続いていき終わることがない)

3. 領域無制約性 : 個人は選択肢をどこから選んできてもよく、またその選択肢を

どう並べてもよい  $\Rightarrow$  個人の選択の自由を保障 (liberalism の原則に立つ)

#### 4. Pareto Optimum(パレート最適) (Pareto: オーストリアの学者, 学際派) ( $\uparrow$ democracy の条件)

集合的選択は、その集合体を構成する個人の選択を最大限尊重すべき

ex. 9 人が  $x > y$

1 人が  $y > x \Rightarrow x > y$

(ただし 1 人の発言力が他より強い場合、現実にはこうならない場合もある)

9 9 9 人が  $x \sim y$

1 人が  $x > y \Rightarrow x > y$

#### 5. 無関係対象からの独立

$x, y, p, q$

A:  $x > p > y > q \rightarrow$  この後、 $p, q$  が選択不能になっても…  
 $\rightarrow x > y$ 、は堅持される

選択肢を限定した後でも、選択肢の間の選好順序は変化しない

抜いた選択肢 (ここでは  $p, q$ ): 無関係対象

分析的理性: 選択肢が多い時、「 $x > y \rightarrow x > p > y > q > r \dots$ 」という風に、  
 $x > y$  は不変と考えてよい

#### 6. 非独裁性 (democracy の条件)

どのような個人の選択も、他の人々の選択に優先されてはならない

1 人:  $x > y$

99 人:  $x > y \Rightarrow x > y$

#### voters' paradox(投票者のパラドックス)

A:  $x > y > z$

B:  $y > z > x$

C:  $z > x > y \Rightarrow$  このような場合に有効な意思決定はできるのか?

上記の 6 条件はもっとも重要であり、これを受け入れるという前提があれば、  
投票者のパラドックスが起こったとき、有効な合理的決定は一般に不可能である  
(選択を変えれば 6 などに反する)

$\Rightarrow$  一般不可能性定理

#### (4) 実例 1955 年 アメリカ上院

多数派: 民主党 (南部・保守派 1/3, 北部・進歩派 1/3)

少数派: 共和党 (1/3)

国道(interstate highway)建設法案

(南部の開発が遅れているため、道路をつなげて経済活性化を図る)

1. 国道建設法案 デイヴィス＝ペーコン挿入句 : 原案 G (民北が支持)  
(労働者の賃金は中央政府が決める→African-American の低賃金改善)  
南部の白人エリートにとっては不都合
2. 挿入句なし : 修正案 S (民南が支持)
3. 廃案 : H (共和が支持)

民主党南部  $S > H > G$

民主党北部  $G > S > H$

共和党  $H > G > S$

ここで上院の院内総務(民南派)が議事手続きに介入

まず、 $G$  or  $S/H$  で議決→民北は  $G$ , 民南・共和は  $S/H$  を支持→ $S/H$  に決定

次に  $S$  or  $H$  で議決→民南・民北は  $S$ , 共和は  $H$  を支持→ $S$  に決定

but これは偶然ではない! (意図あり)

投票者のパラドックスが起こっている時、最初に1つの選択肢を分離すると、その一つが負ける。

⇒これを経路依存性(path dependency)という→慎重にしなければならない

〈別の意味〉

制度は時間の経過と共に変遷していくが、多かれ少なかれ昔の制度を受け継がざるを得ない ⇒これも path dependency (歴史的制度論)

### 314 集合財の理論 M.Olson

〔参考〕M.オルソン『集合行為論』(ミネルヴァ書房)

(1)集合財 (財: 人間の欲望を見たす物的手段)

〔定義〕collective(public/common) goods

集合財 (公共/共通財)

⇒他人の消費を拒否できない財 (ex. 電車, 教室, 空気)

(⇔通常多くの財は個人財であり、他の人は同時に使えない)

(2)集合財と個人の選択

- ・大規模な集団
- ・個人—合理的選択 (基本的価値)  
→集合財は選択できない

1. 大規模集団

個人の犠牲→効果は期待できない

(自分が犠牲をはらっても僅かな効果しか出ないから)

更に、他の人々の選択は不明→集合財が手に入るかわからない

逆に、他の全ての人々が犠牲をはらえば、自分の犠牲は不要

⇒自分の犠牲なし+他の人々の犠牲→集合財○ ということになる

## 2. 大規模な集団

1. 何もしないくても集合財○

2. 犠牲をはらう→but 誰からも賞賛なし

犠牲を払わずに集合財を手に入れる人(free rider)の存在

⇒個人: 合理的→何もしなくても集合財が手に入るなら犠牲を払おうとはしない

3. (以上より) 集合財は手に入らない

## 4. 解決策

1. 独裁性 (dictatorship) →間違える可能性あり

2. 政治的企業家 (political entrepreneur)

(注: 辞書では「entrepreneur(=起業家, 事業家, 請負人)」となっていました)

個人の合理性の範囲外で、集合財入手のため犠牲を払うことを呼びかける

political leadership

1 より 2 の方が人々の本当の需要にこたえられる

## 5. 特徴と批判

(1) 精密な理論 (数式が多い) →厳密すぎて現実離れしやすい

but 一人一人が個人の自由に寛容な社会でどのような集合的選択が可能か、  
ということの答えにもなっている

(2) 合理的人間観→人間はそんなに合理的なのか?

(3) individualism

ばらばらの個人を集めてきてものを考える

= atomism(原子論): 全体より個々の構成要素に重点を置く

⇔ holism(全体論) ex. 封建制下の社会観, ファシズム, globalism

長所) 個人の重要性(権利)を最大限に尊重 (liberal democracy の原点に回帰)

短所) 人間はそれほどバラバラなのか?

## 330 政治的リーダーシップ

J.M. Burns, Leadership(1978)

(1) 起源

1. ギリシャ時代 プラトン

どんな人が政治的支配者になるべきか?

⇒哲人王 (Philosopher-king): 物事を見通す高度な理性=叡智を持つ者

2. ルネサンスの時代

マキャベリ 君主に必要なもの

力 (power) : (イタリアを統一する) 軍事力

技術 : (統一のための) 交渉, 暗殺

野心 : (統一後) 自分が政治的支配者になろうと望む心

### 3. 19 世紀末

M.Weber 支配の 3 類型

a. 合法的支配 (legitimate authority)

b. 伝統的支配 (traditional " )

c. カリスマ (charismatic " )

(人格, 資質, 呪術能力, 英雄性(負けたことがない etc...) に対して  
emotional に支持する)

but 厳密には全てが leadership 論ではない

c は確かに leadership 論だが, a, b は authority(権威)の資源論

### 4. 20 世紀前半

権力学派 (power school) が中心

↑ 政治の問題は、権力を誰が握り、どう行使するかという権力の問題だとする

ラスウェルは権力学派の代表ではないが、その伝統を引きずっている

“無限に権力を追求し、他の何よりも権力を求める、という人間像”

### 5. 1960-70 年代

a. 現実の社会 個性の強い leader がいなくなる

(30~50 年代はヒトラー, スターリン, チャーチル, ローズヴェルト etc

80 年代になると個性演出型の登場: レーガン, サッチャー,ブレア etc)

b. 政治学—大衆主義の浸透→一般の人が政治を決定する機会が増え、leader  
が注目されなくなる

c. 心理学, 社会学, マーケティング論において leadership が多用され始める  
→一つの民族の運命を決めるような重要な leadership ではなく、日常での  
leadership が注目される⇒ “leadership の遍在論”

これに対し Burns は政治的 leadership 論の再構成が必要と考えた

#### (2) 考え方

1. leader は follower に影響力を行使する

2. leader と follower は同じ目標を持つ

leader は follower の利益関心 (interest) に働きかける

$G = f(I_r, P_r)$   $P_r$  = 目標 (purpose)

### 331 権力と leadership の区別

democracy の普及に伴い、旧来からの剥き出しの権力は今は表に出なくなり、権力

は目立たないよう行使されるようになる

→democracy 中での権力／leadership を区別する

(1)相互作用としての leadership (⇔権力の行使者：自分の目標の一方的な押しつけ)

1. 目標の重視

L(leader)と F(follower)の目標は一致してなければならない

2. 相互作用：LとFとの間には「対話」が必要

LはFの様々な主張を聞きながら徹底的に人々と対話し、説得して人々を従わせる

(2)定義

1. 権力の定義

潜在的に「権力を持つ人」(power wielder)

a. 自分の目標を達成しようとする動機(motive)により、

b. 資源を動員して、

c. 「権力を受ける人」(power respondent)に影響を与える

2. リーダーシップの定義

特定の動機や目標(purpose)を持つ人は

a. 他の人々と競争や闘争しながら、

b. 資源を動員して、

c. followerの動機(motive)を引き出し、(同様のことを考えている他の人と)結び付け、(目標を達成し)満足させようとする

### 332 リーダーシップの2類型

(1)相互取引型 transactional リーダーシップ (ex.田中角栄)

LとFとの間で価値の交換を行う 継続的でない

(ex. L：トンネルをつくる F：Lを支持し選挙で投票する)

(2)相互変容型 transforming リーダーシップ

定義 LがFの潜在的要求(本来気付かなかったもの)を認識

→潜在的な動機を引き出す

LとFは互いに励ましあい、高め合うという継続的關係(ex.ガンディー)

E.H.エリクソン『ガンディーの真理』(みすず書房)

(3)類型の意味(解説)

1. 現代政治学の流れの中で、曖昧になっていた権力と leadership を明確に分離

2. リーダーシップ研究における意味



- ・偉人説（その人が資質を持っていたからリーダーになった）
- ・状況説（状況がリーダーを必要とし、リーダーを生んだ）

状況は大切，**but** その中で真の問題を見抜き、思ってもみない解決法を思いつく人間が必要  
⇒両説はどちらも正しく、折衷が重要

### 3. 類型そのものの検討

類型の基準が一定でなければならない

Burns の理論には基準が2つ（関係と目標）

関係 目標	価値 交換	要求・動機を 引き出す
一時的	transactional	1
継続的	2	transforming

上記の表からもわかるが、この理論では空欄1，2にあたる類型が言及されていない

⇒1は理論的に無理があるが、2はありうるのではないかな？

### 333 特徴と批判

#### (1) 〔特徴〕

単なる権力・影響力と **leadership** を区別する試み

相互変容型の、対話の中で相互に高めあっていくということを重要視

#### (2) 〔〃〕

L と F の **interaction** に注目し、**interaction** を強調する

→**leadership** 遍在論に対し、本当の **leadership** との質の違いを示す

（**democracy** の中に遍在している **leadership** の中から本来のものを区別し、特性を強調）

**but** これはハードルが高すぎるため、最近では本当の **leader** と言える指導者があまり出ていない（**ex. J.F.ケネディ**）

#### (3) 〔批判〕 類型と概念の不備

〈類型〉

- ・332の(3) - 3にあるような類型の不備
- ・相互取引型の、高く支持をしてくれた人に高い **interest** をもたらすという性質  
→普通の取引(**bargaining**)とどう違うのか？  
この「相互取引型」という類型を設定することで、むしろ Burns 自身が

leadership 遍在論を引きずっている

〈概念〉

L と F はどのようにして「相互に高めあう」のか？

⇒物事の意味づけを変えていくこと (symbol・sign の操作)

ex. ガンディー

人々が単に「生活が苦しい」と言うことについて、社会の存在形態(植民地支配など)に原因を置いて対話する

→人々の視野を広げていく

## 400 政治社会の理論

### 401 考え方の歴史

(1) ギリシャ・ローマ時代 哲学・制度論

“理想的なポリス／共和国とはいかなるものか？”

(2) 中世 「神の国」 社会・集団のモデル

信仰(神への愛)により、絶対者である神と個人がそれぞれ結びつけられている  
+ 社会の有機体観 (封建制を根底で支える)

(3) 近代

・ 絶対主義国家の理論 (封建制を破壊)

・ 近代政治イデオロギー (強大化した絶対主義国家から個人を守るためのもの)  
→我々が属しているのは後者で、未だに自由・平等な合理的個人を前提としている (実際はどうか、というのは別問題)

ex. 参政権は一人一票 (but 現在の日本では一票の格差が大きい)

個人 (前提)	+	制度	⇒	良い政治
↓		政治機構 ↓		↓
材料(良いもの)		レシピ(調理法)		料理

近代政治イデオロギーでは、材料たる個人の高品質を前提としている

⇒政治の良し悪しは、レシピである制度の出来の問題

### 402 マルクス主義による政治社会の理論

(1) 階級社会 (class society)

ex. 古代：自由人と奴隷 中世：貴族と農奴 現代：資本家と労働者

(2) 階級闘争 (class conflict) (⇔均衡理論 balancing theory)

特権階級(支配階級)・非支配階級の間で権力の奪い合いが生じている  
(平和的に共存していない)

今の日本の現状 (行き詰まりをみせながらも安定はしている) とは正反対の状態

(3) 国家＝暴力操置(暴力装置)

(⇔多元的国家論における国家の相対的優越 ←国家は集団の調停役であるため)  
国家とは、支配階級が特権を守るために使用する暴力装置である  
(ex.警察, 裁判所 etc...)

(4)  $S_c = f(P, C_f)$       $S_c$  : society    $P$  : power    $C_f$  : conflict

権力をめぐる階級闘争によって我々の社会は成り立っている

(我々の社会を分析するには、権力をめぐる階級闘争がどのように行われているかをみればよい)

(410 番台は講義の残り時間の都合上省略)

#### 420 構造=機能論     G.A.Almond

structual-functional

G.A.Almond & J.S.Coleman   『The Politics of the developing Area』 (1960)

途上国の発展を分析した最初の研究

G.A.Almond & G.B.Powell, Jr.   『Comparative Politics』 (1966)   比較政治論

(1) 源泉

1. 文化人類学     19世紀半ばのヨーロッパで発達

(アフリカや太平洋の島々で次々と目新しい文化が“発見”される)

未開社会(文明が発達していない社会)の研究を行う

実体論には限界がある

…実体としての議会が存在しないが、部族の方針は話し合いで友好的に決定されている

実体論：要素そのものを考える (ex.議会, 国王 etc...) →×

機能論：要素と要素の関係を考える

(ex.呪術師と病人・怪我人→医者と患者

部族の古老と子供達→教師と生徒 etc...)

2. 第二次世界大戦後

アメリカ社会学   機能 - 構造論   T.パーソンズ

我々の社会は比較的安定した機能の組み合わせ(=構造 structure)からなる

(2) 構造=機能論と政治社会

$S_c = f(S_r, C_1)$       $S_r$  : structure (2に由来)      $C_1$  : culture (1に由来)

#### 421 政治システム

=政治構造+政治文化

(1) Political Structure

定義：「観察可能な行動=相互に関連している役割」の集合

(ex.選挙   行動：投票, 開票, 立ちあい, 立候補 etc...)

役割：有権者，当選者，自治体職員 etc...)

## (2)政治文化 Political Culture

### 1. 定義：政治行動の背後にある心理的性質

ex.選挙（日本の場合）

行動：（候補者）“当選まであと一歩です、どうか私に投票して下さい！”

言って土下座する

性質：（有権者）“あの人があそこまでして懇願しているんだから、投票してあげよう”と思う

### 2. 種類： a. 政治態度 political-attitude

（attitude：心理学用語で、心の構え方，心的態度のこと）

b. 政治信念 political-belief （個別的・具体的）

c. 政治価値 political-value （一般的・抽象的）

d. 政治技術 political-skill 技術は文化により異なる

ex. 英米：政治家は、政治家の価値とされている“冷静さ”を示す

東アジア：人の心を動かすため、感情的に訴える

## (2)政治システム

政治システムにおいては、役割が複雑に絡み合っており(システム外との繋がりを持つものもある)、その背景には culture（心理的性質）がある

〈認識と環境〉

我々はものごとの全てを認識することは出来ない→認識上で区切る

この時、認識したもの＝システム

認識外のもの＝環境 となる

⇒システムには常に環境が伴う

## 422 政治システムの機能

### (1)入力機能 input function

#### 1. 政治的社会化(political socialization)と補充(recruitment)

political-socialization：

政治的役割・文化を若い人々に教える→システムが長期にわたり安定する  
（反システムの人間を増やさない）

political-recruitment：

より特殊な役割・文化を身につけさせる 目に見える形／見えない形がある

#### 2. 利益表現（利益表出） interest articulation

個人・集団から、政治で意思決定に携わるエリートに対して様々な要求を出す  
こと （利益集団 interest group (ex.経団連，労働組合 etc...))

1. 物理的デモンストレーション (ex.暴力, テロ etc...)
2. 個人的コネクション (ex.血縁, 閥閥(政界や財界に多い), 学閥, 地縁 etc...)
3. エリート代表 自分達の代表を国会議員や官僚として送り込む  
多くの利益集団が行っている (特に政治)
4. 制度的・公的チャネル (チャネル: コース, 道のこと)  
利益表現をする様々な道が存在しており、様々な疑問・不満を申したてるチャネルが用意されている (選挙もその一種)

### 3. 利益集約 interest aggregation

対立する様々な要求を、納得がいくように具体的政策にまとめあげる  
(官僚組織・政党の役割)

スタイル (機能を果たす特徴的なやり方)

#### 1. 実利=取引型

利益をマーケットと同様にやりとりする

ex.業界対策 (規制を強める→業界は反対→業界に融資)

#### 2. 絶対価値志向型 (取引できない)

様々な利益関心を世界観やイデオロギーに還元 (ex.共産党)  
→対立が発生

#### 3. 伝統型

様々な利益関心を過去と同じように扱う (ex.幕藩体制)

昔とは異なる現在の状況に対しても、昔と同じように対処する官庁なども  
この伝統型

⇒こうして集約された利益は政治システムの中へ

### (2)出力機能 output function

#### 1. 規則制定機能 the rule-making function

法律, 行政命令・指導などの規則を制定

(議会による立法～官僚による行政命令まで)

#### 2. 規則適用機能 the rule-application function

官僚組織による行政 (現状は過去をあてはめる体質の行政)

#### 3. 規則判定機能 the rule-adjudication function

裁判所が果たす機能

(アーモンドによると)

2, 3は区別が難しい場合もある

3を別にした意義←現代社会は3を専門に行う機関(裁判所)が存在するから

(3) 通信機能 communication function

他のものとは並立しない

入力・出力は通信によって果たされている

423 特徴と批判

(1) 〔批判〕 機能主義

機能主義は均衡論に陥りやすい

“～の機能を果たしている”とは言いやすいが、役割を果たしているかどうかは  
言いづらい→機能不全を論証するのが難しい

(2) 〔批判〕「政治文化」概念

政治システム = 構造 + 文化

機能的に全て均質 定数 変数

(アーモンドによれば)

「政治文化」とは分類がつかずに残った残余類型(residual category)である

論証しにくいものの集まりであるため、厳密な学問として成立していない

500 最後に (伝えたいこと—by 高橋教授)

1. 相対主義 100 パーセントこれだけ、という絶対的な政治理論はない

2. 「自分の頭」

既成の権威・組織に頼らず、自分で考えることが大切

組織の中ではある程度その組織の体質に合わせる必要があり、自分の意に反することを行わざるを得ない時もある。その時も心の中では“自分はそう考えてはいないが”という前置きをしてから行動し、完全に組織に染まらないようにする。

—fin—